

# 驚きの

# 「介護民俗学」

民俗学者・特別養護老人ホーム介護職員  
六車由実

第8回

## 利用者同士の 理想的な関係

### サエさんの叫び

色白でぽっちゃりとした愛らしい容姿をもち、歌の大好きな楠本サエさんは、職員たちの人気者である。ショートステイの利用者であるサエさんがやってくると、施設の雰囲気がなんとなく明るくなる。

歩行のおぼつかないサエさんを車いすに乗せて、施設内を散歩してみる。サエさんは、「あかいくつー、はーいてたー、おんなのこー」と声を張り上げて歌いつづける。事務所で仕事をしていた職員たちはその声に誘われたかのように、廊下に出てきて、「あーサエさんだ。いらっしゃい」「サエさん、こんにちは」「サエさん、今日もお元気

© ioannis kounadeas - Fotolia.com

Yumi Mugiura

1970年、静岡県生まれ。大阪大学大学院文学研究科修了。博士(文学)。民俗学専攻。東北芸術工科大学東北文化研究センター研究員、同大学芸術学部准教授を経て、現在、静岡県東部地区の特別養護老人ホームにて介護職員・生活相談員として勤務。

論文に「人身御供と祭」(『日本民俗学』220号、第20回日本民俗学会研究奨励賞受賞)、「神、人を歌う——人身御供の民俗学」(新福祉、2003年)で2002年度サントリー学芸賞受賞。

です」と次々に声をかけてくれる。それまで歌いつづけていたサエさんも、にっこりとして「あーはっはっは、こんにちは一」と答える。若い女性職員たちは、「もうサエさんといるとすごく癒されるーって感じ。サエさん大好きだよ」と言って抱きしめたりする。サエさんは、「あーはっはっはー」と笑っている。

たしかにサエさんは、白クマのぬいぐるみのようなかわいらしさがあふれ、私も思わず抱きしめてしまいたくなる衝動にかられることがある。その衝動を静かに抑えつつ、ときどき語りかけながらサエさんの隣に寄り添ってみる。

重度の認知症をかかえているサエさんは、よく「あーー」と叫び声を上げる。その声はソプラノ歌手の発声練習のようでもあり、音程をときおり変えながら喉を鳴らしている。実際、サエさんは歌い始めるとその鍛えあげられた喉を存分に使ってソプラノの声を施設中に響かせる。そして、唱歌から懐かしの歌謡曲、軍歌まで、歌詞カードを見ずとも口ずさめる曲の数はかなり多い。もしかしたら、かつてサエさんは本当に歌を勉強していたのかもしれない、とも思えるほどだ。

職員たちは、サエさんの「あーー」が始まると、「ああ始まった始まった」と少し安心した表情になり、一緒になってサエさんのソプラノに声を合わせたり、そのまま歌をうたうように促したりしている。逆に、サエさんが何も叫ばずに静かにしていると、居眠りをしているのか、それとも体調が悪いのかと、心配になったりする。サエさんの「あーー」は、職員にとっては、サエさんの元気さを確認するバロメーターになっているのだ。

だが、他の利用者さんたちは必ずしもサエさんの叫びを心地のよいものとは思っていないようだ。そこがショートステイの難しいところなのだろうが、互いに面識のない利用者さんたちが、それぞれのご家族の都合で不定期に利用されるために、利用者さん同士でコミュニケーションをとったり、ましてや仲がよくなることはなかなか

い。施設内のデイサービスの利用者さんでも、ショートステイに来ると知り合いがないからつまらないと言って、昼間はほとんど個室にこもっている方も多い。

だから、そういう利用者さんにとっては、サエさんの「あー」というソプラノの叫びも、穏やかな静けさを壊すノイズにしか聞こえないのかもしれない。「うるさいなあ」と批難したり、そうでなければ、「かわいそうに(あんなになっちゃって)……」と声の主のほうに憐れみの視線を向けるのが精いっぱいなのである。

## サエさんと聡子さん

さて、当のサエさんといえば、まわりの様子はお構いなしに「あー」と叫んでいるようにも見える。でも、よく聞いていると、さまざまな声色で音程を変えながら「あー」と叫びつづけて、そして決まって最後には「あっはっはっ」と笑いのようなリズムを刻む。そのとき頬を一粒の涙が伝っている様子をたびたび見かける。そんなサエさんの「あー」を聞いていると、私は胸がしめつけられるような気持ちになってくる。

それで「サエさん、どうしましたか。涙が出ていますけれど」と思わず声をかけると、サエさんは我に返ったかのように急にこちらを向き、「何の涙だかわかる？」と低い声で問いかけてくる。私は不意打ちを食らいたじろいでしまう。

「何の涙でしょう。悲しい涙ですか」と聞くと、間髪をいれずに「まさか！」と言われてしまった。そして私のうろたえた気持ちを察したかのように、サエさんはまた「あー」と歌いはじめた。

まるで私の生き方の甘さや軽薄さを見透かされ、「あなたにはわかるわけないさ」と言われているような気持ちにさえなる。私には、「あー」と叫ぶサエさんの心の奥深くになかなか届くことができない。そういうとき、つくづく自分の未熟さを痛感する。

ところが、たったひとりだけ、そんなサエさんが心を許している人がいる。ショートステイを毎月長期間利用している菅谷聡子さんである。

聡子さんは、サエさんが「あー」と叫びはじめると、「サエさん、なあに」といつ

驚きの  
「介護民俗学」

も優しい声をかける。そして、サエさんも聡子さんのほうを向き、「あのね、嫌になっちゃったのよ」と呟いたりしている。「サエさん、何が嫌になっちゃったの」と聡子さんが聞いても、「嫌になっちゃったの」とだけ繰り返し、サエさんは何もなかったかのように視線を遠くにやり、沈黙する。聡子さんはそれをしばらく見守っていると、大きく頷き、そしてお茶をすすっている。

そんなやりとりを見ていると、私には、サエさんと聡子さんとはどこか深いところでお互いにわかりあっているようにも思えてくる。私の心には恥ずかしながら嫉妬のような奇妙な感情が湧きあがってきた。だが、次の瞬間、自分のあまりの愚かさに気づき、自己嫌悪に陥る。

そんな私の心の内を察してかどうかわからないが、ふだんから私がサエさんと関わろうとしている様子を見ている聡子さんは、自分が感じてきたことを惜しみなく教えてくれようとする。

サエさんね、このあいだ、こんなことを言っていたわよ。「全部なくなっちゃったんだ」って。「何がなくなっちゃったの？」と聞いても、詳しくはわからなかったんだけど。それにね、お家にいると、「いつもぼーっとしていると怒られる」とも言っていたわ。あとね、「何もしてくれないの」とも言っていたわよ。サエさん、お家の人に嫌がられているのかしら。私ね、サエさんは何か大きな心配ごとを抱えているんじゃないかと思うのよ。私にはどうにもしてあげられないけれどね。

ほとんど会話が成り立たず、他の利用者さんたちから疎まれてい存在であるサエさんに、聡子さんは優しく声をかけるばかりでなく、発語を促し、その断片的な言葉をつなぎ合わせて、サエさんの置かれた境遇を思いやっていた。私が「介護民俗学」という名のもとにやろうとしていて苦戦していることを、ひとりの利用者が自然にしている。その事実、私は衝撃を受けた。でも一方で、それが聡子さんであることはある意味で納得できるようにも思えた。

## 人生の苦楽を味わってきた

ショートステイで私が初めて聡子さんを見かけたとき、色とりどりの豪華な宝石の

ついた指輪で両手の指を飾っていた。「きれいですね」と声をかけると、「家のダンスのなかに転がっていたものを適当につけているだけよ。指に金銀をつけていると運気が上がるっていうからね」とさりと答えてくれた。指輪だけではなく、洋服も眼鏡も化粧も、身につけるものはすべて鮮やかでありながら上品である。しかも、しゃべり方が江戸っ子のようにちゃきちゃきとした<sup>おご</sup>姐御肌の女性でもある。

他の利用者さんとは雰囲気異なる聡子さんに、私は一目で惹きつけられた。聡子さんはどんな人生を送ってきて今ここにいるのだろう。私は聡子さんにお話をぜひ聞いてみたいと思った。

聡子さんは、昭和3年生まれ。実家は本店で、お手伝いさんを大勢雇っていた。そんな恵まれた環境のなかで、ひとり娘だった聡子さんは親に甘やかされて育ったという。商家だったので父親は何もできなくていいと言って、聡子さんには家事はさせず、嫌いな裁縫もやらせなかった。「だから襦袢も縫えないの」と少し恥づかしそうに言う。だが、結婚してからも、女中さんに家事の一切を任せていたので、困ることはなかったという。

そのかわり勉強も遊びもよくした。子どものころは、家の二階に籠もり小説を読みふけた。また成人してからは日舞を習い、男舞を踊っていた。結婚してからは、ご主人と一緒に芸者遊びもした。「今日はちょっと芸者を上げましょうか」と聡子さんが言うと、ご主人もその誘いに乗り、夕方になるとふたりで料亭に出かけていく。そして3~4人の芸者衆をお座敷に上げて豪遊することがたびたびあったのだそう。

「線香一本いくらっていう計算だったわね。いくらだったかは私は知らないけれど」  
なんとも粋な生き方ではないか。

聡子さんは、生まれてからこれまでお金には困ることなく、悠々自適で自由気ままに生きてきたのだった。でもその一方で、人生の辛酸もなめ尽くしてきた。

聡子さんによれば、実家の店を継いだご主人は背が高く男前だった。そのためか女遊びが絶えず、聡子さんはいつも苦しめられてきた。ふたりで料亭に出かけても、帰りは聡子さんひとり車に乗せられて、ご主人はいちばん若くてきれいな芸者を指名して遊びに行ってしまう、朝帰りをすることがたびたびあった。バーのママを連れて旅

驚きの  
「介護民俗学」

行に出かけてしまうこともあったし、店の事務員として働いていた若い女性と関係をもっていたこともある。その女性から聡子さんは嫌がらせを受けて苦しんだ。85歳で亡くなったときにも愛人があったという。でも亡くなった後は墓参りにも一回も来ない。聡子さんは、仏壇に向かって、「ほら見なさい、あなたがどんなに好きでも、彼女は墓参りにも来ないじゃない」と何度もぼやいたそう。

ご主人には常に女性の影があった。だがご主人に対して、聡子さんは何も言えなかったという。言っても何も変わらないし、殴られるだけだったからだ。「そういう男を旦那にもつと、女ばかりが苦勞するんだよね」と聡子さんは悲しいとも悔しいともつかない表情を浮かべた。

聡子さんの苦しみはそればかりではない。跡取り息子が数年前肺がんのために亡くなった。そしてその後ご主人が脳出血で倒れた。ご主人は施設に入ることを頑強に拒んだので、聡子さんは自宅でききりで介護した。そして聡子さんに看取られて、息子の後を追うように亡くなった。苦勞させられたとはいえ、相次いで身内を亡くした喪失感は大きい。

そうした苦樂を存分に味わってきた聡子さんは、自分の人生を冷静に受け止めているように見える。いつも私たちに前向きな考え方を披露してくれる一方で、その後ろには底知れない孤独が感じられる。だからだろうか、いろいろな利用者さんがいる施設のなかでもとりわけ目立つ聡子さんは良くも悪くも注目的だが、それにまったく動じることなくマイペースに過ごしている。かといって周りに無関心かといえばそうではなく、他の利用者さんの様子をよく見て気を配っているのである。そうした聡子さんだからこそ、「あー」と叫ぶサエさんの心に自然と近づいていけるのかもしれない、そう思える。

## 悲しみを分かち合う

ある朝ショートへ行くと、いつも冷静な聡子さんの表情が驚くぐらい曇っていた。長期ショートの一時期帰宅後のことである。「おはよう」という声も濡れている。聞いてみると、娘さんが亡くなったのだという。

聡子さんの娘さんはずいぶんと前からがんと患っていて再発を繰り返し、そのたびに抗がん剤治療を受けていた。娘さんの体がどんどん弱くなっていくのが心配でたまらないと以前にも心の内を話してくれていた。その娘さんが、聡子さんが入所してい

るあいだに亡くなってしまった。娘の遺言で聡子さんには知らせなかったのだと、一時帰宅したときにお孫さんから聞いたそうだ。

娘が「死んだらすぐに迎えに来るよ」と言っていたのに、全然来ないのよ。息子も旦那も死んで、そして娘も死んでしまった。もう血のつながった家族はいない。だから私は生きていても仕方がない。

聡子さんの絶望の深さは痛いほど伝わってきたが、私にはどう声をかけていいのかわからなかった。ただ、「そうですか」と頷くことしかできなかった。

翌朝ショートに様子を見にいくと、聡子さんにはいつもの飄々とした笑顔が戻っていた。聡子さんは言う。「きのうの夜ね、ここでね、宴会やったのよ」と。「宴会？」と私が驚くと、聡子さんは同じショートの利用者である鎌田徹さんの方を向いて「ね！」と言いながら、右手で乾杯のポーズをとった。その場にいた夜勤の職員も目配せをした。鎌田さんはいつも寝酒を楽しんでいる人である。なるほどと納得した。

後で聡子さんと話していたら、「私、きのう気が狂いそうだったの。本当に。でも、お酒の力に助けられたわ。鎌田さんにもたくさん話をしたの。いい飲み友達ができたわ」。そうこっそりと教えてくれた。

脳梗塞による片まひの後遺症が残る鎌田さんは、頼りにしていた奥さんを数年前に亡くしている。聡子さんと鎌田さんとはどんな一晩を過ごしたのだろう。サエさんと聡子さん。聡子さんと鎌田さん。利用者さんの悲しみを、利用者さん同士で分かち合い、そして励ましあっている。もしかしたらそれがいちばん理想的な利用者同士の関係なのかもしれない。

介護職員が立ち入れない場所がある、力の及ばないところがある、ということをおぼろげに知った。目配せをした職員のように、立ち入らずに、利用者同士の関わり合い方を遠くで見守っている、ということも必要なのかもしれない。ただ一生懸命に利用者さんに近づこうとしてきた自分の姿勢を反省する出来事であった。 

## 驚きの 「介護民俗学」